

ウェディングドレスの進展と京の街のブライダルビジネス

大澤 香奈子

The Popularization of Wedding Dresses and the Bridal Business in Kyoto

Kanako OHSAWA

I はじめに

京都は古くから伝統的な繊維産業の街として栄え、人々の装いに対する関心の高さや磨かれた感性は「京の着倒れ」という言葉にも表れている。和装文化のイメージが先行するが、老舗百貨店による海外デザイナーとの提携や、1949年（昭和24）の大丸ドレスメーカー女学院設立にみられるように戦後の早い時期に洋裁学校が設立されたことも京都の特徴の一つである。戦後から昭和の終わりにかけて、京都には多くのウェディングドレスメーカーやブライダル関連企業が設立され、国内で唯一のウェディングドレス産地といえる活況ぶりを呈していた。ウェディングドレスは、1959年（昭和34）のロイヤルウェディングをきっかけに一般に広く認知され、需要も増していく。これにも京都は大きく係っており、そのようなブライダルの街としての京都を見ていきたい。

II ウェディングドレス市場の創出

1. 婦人雑誌の役割

日本の女性たちに洋装を広める一役を担ったものに婦人雑誌がある。婦人雑誌は最新流行のファッションなどを女性たちに伝え、洋装の普及に貢献していた。1946年（昭和21）に創刊された「それいゆ（創刊当初は Soleil）」は中原淳一のイラストも評判であった。これに結婚特集が度々掲載され、結婚についての考え方や、著名人の新婚生活などが取り上げられた。デザイナー隅田房子のウェディングドレスのデザイン画（図1）や、和装の花嫁、洋装の花嫁の写真が掲載された。「戦後十年」という流行語を生みだしていた1955年（昭和30）には、古い形式に新しい良さを加



図1 隅田房子のウェディングドレスのデザイン画
「それいゆ」No.14（昭和25）

味した、「新しい結婚」として帝国ホテル経営の犬丸家と富士フィルムの小林家の結婚も紹介されている。そこには堂々たるウェディングドレス姿の花嫁、そして神式をもって行われた挙式にウェディングドレスで臨まれた花嫁を見ることができる（図2）。他にもイラストで人気を博していた中原淳一によるウェディングドレスのデザイン解説（図3）なども掲載されている。「それいゆ」には当時の最新流行のファッションが解説付きで掲載され、当時の女性たちが新しいファッションに夢中になった。ウェディングドレスもそのファッションと同じく、こうした雑誌を通じて、これ



図2 昭和30年の洋装の花嫁
「それいゆ」No.35（昭和30）



図3 中原淳一が解説した花嫁衣裳
素材は木綿のれーすと記載
「それいゆ」No.22 (昭和27)

までごく一部の女性たちの衣裳であった洋装の花嫁衣裳、ウェディングドレスは徐々に一般にも知られることになった。さらにホテルウェディングの様子が掲載されれば、これへの憧れをも呼んだのである。ウェディングドレスを着る花嫁は、昭和40年頃はまだ3%程度であったというが、1975年(昭和50)には13%まで増加、その後も増加が続きウェディングドレスの認知、需要は一般にも広く拡大していった。

2. ロイヤルウェディング

ウェディングドレスの認知、需要拡大に一役買った出来事がもう一つある。昭和のロイヤルウェディングである。1959年(昭和34)に行われた皇太子と美智子妃の結婚式は、その様子がテレビで放映されるなどしたため、美智子妃殿下の純白のローブ・デコルテ(ウェディングドレス)姿(図4)は日本全国の女性たちに広く知られ、女性たちのウェディングドレスへの憧れを決定づけた。美智子妃殿下がお召しになったローブ・デコルテはフランスのクリスチャン・ディオ-



図4 龍村美術織物の布地で製作されたディオールのローブ・デコルテ
皇室 our imperial family 第42号表紙

ル社に依頼されたものであった。当時のファッション界はディオールの独走状態にあったと言っても過言ではなく、1953年(昭和28)に日本でコレクションを発表して以来、日本においても広く知られていた。ディオールは1954年(昭和29)のコレクションで日本をテーマにした作品を発表するが、その作品には染織や古代裂の研究、復元で知られる京都の龍村美術織物の布地が使用された。ディオールが世界から絶賛されたと同時に京都の高級絹織物が世界から注目され、高く評価されたのである。さて、ディオールが依頼を受けた皇太子妃殿下のためのローブ・デコルテは3点あったが、これらにも龍村の織物が使用された。そのドレスのために龍村が製作した織物は、金糸をシルク糸にからませて織った「明暉瑞鳥錦」と銘打つ、鳳凰と竜が幾重にも織り込まれたものであった。また、当時のディオール社の日本代表は京都の大丸百貨店に設けられた、オートクチュールの「ディオール・サロン」であり、そのアトリエでディオール社の作品も作られていた。つまり、女性たちの憧憬の的となった皇太子妃殿下のローブ・デコルテ(ウェディングドレス)は京都の地で製作が進められたのである。

このロイヤルウェディングは女性たちのウェディングドレスへの憧れを決定づけたと同時に、結婚式の「和」から「洋」へのスタイルの転換点でもあった。それまでの料亭あるいは自宅、振袖、お座敷のスタイルから、ホテルあるいは結婚式場、ウェディングドレス、テーブルへと変化したのである。明治のころから一部の上流階級にのみ許される贅沢であったホテルでのウェディングも、昭和30年代後半からホテルの開業が相次ぎ、昭和40年代には一般に広まっていった。ロイヤルウェディングの後、昭和40年代は団塊世代の結婚ブームを迎え、1972年(昭和47)には婚姻件数は約110万件に達している。京都の地は昭和のロイヤルウェディングのドレスに係わっただけでなく、日本の花嫁たちのウェディングドレスの需要に応えるかのように、1970年代に次々とウェディングドレスメーカーが誕生している。

Ⅲ 京の街

1. 繊維産業と京の着倒れ

京都は西陣、京友禅をはじめ伝統的な繊維産業の街

として古くから栄えてきた。機織り、意匠デザイン、染色、刺繍、縫製さまざまな生産工程が分業となっている京都の街では、人口の約半数は繊維産業に何らかかたちで係わってきたとも言われている。1934年（昭和9）には現在の京都織物卸商業組合が設立され、西陣と京友禅の両産地と併せて和装・テキスタイル・アパレル等の最大の繊維卸商業組合を同じ市域に擁することになった。市内中心部の室町通りを中心に老舗呉服店や服飾関連企業が多く集まっており、京都の街のまさに真ん中が産地の中心であった。

洋装についても京都はいち早く大丸が1953年（昭和28）にクリスチャン・ディオールと独占契約を結び、「ディオール・サロン」を開設している。その後も大丸、高島屋の両百貨店は独占契約による海外デザイナーとの提携を実現し、欧米ファッションの普及に大きく貢献した。市井の人々は、「大丸さん」「高島屋さん」と親しむ老舗百貨店を通じて、いい着物、最新のファッションを身近にしてきた。それまでは雑誌を通じて知る他には術がなかった憧れのファッションを、人々は直に手に取ることができるようになったのである。「京の着倒れ」というが、京都人の常に新しいおしゃれに興味を示し、それを上手に取り入れるに長けた能力もまた、京都をプライダルの街と成す大きな背景だったといえる。

2. ドレスメーカーの人材育成

大正末から昭和初期に誕生した文化服装学院、ドレスメーカー女学院、田中千代服装学園などの洋裁学校が、終戦後に巻き起こった洋裁ブームに乗り、全国に連鎖校網を広げていった。京都においても伝統的な繊維産業の一方で、そうした洋裁学校の動きに併せて洋裁文化の形成がなされた。その一役を担ったのが、1949年（昭和24）に開校した「大丸ドレスメーカー女学院」である。

元大丸社長里見純吉がドレスメーカー女学院の磯村春を学院長に招いて開校した、京都の老舗百貨店大丸により、大丸グループの専門技術学校として設立した洋裁学校である。当時、文化服装学院がファッションの大衆化を予感させるアパレル産業向けの人材養成を目指したのに対し、ドレスメーカー女学院はパリのオートクチュールを志向した人材育成を行っていた。ファッションの時代の到来を予見し設立された大丸ド

レスメーカー女学院では、戦後復興の途上で物資もままならない状況にありながら、高度な洋裁技術教育がいち早く行われたのである。昭和40年代半ばには立体裁断を含む既製の技術教育も行われた。オートクチュールの技術を広めると同時に、縫製技術の向上に大いに貢献した。京都では西陣、京友禅の各生産工程において職人と呼ばれる高い技術を有した人々を大勢生み出してきただけでなく、オートクチュールの技術を持つ人材も多く育成されてきた。

IV 企業化する花嫁衣裳製作

1. パイオニア企業、ワタベウェディング株式会社

終戦によって社会が落ち着きを取り戻すにつれて、日本は結婚ブームを迎えていた。1947年（昭和22）にはわが国の最高の婚姻率を記録するのだが、戦中は結婚式を挙げられなかった人々が終戦後に結婚するケースが多くあったためである。しかし、この当時の花嫁衣裳の多くは振袖であったし、当時の京都に総合結婚式場といったものはまだ無かった。その先駆者となった企業が、1953年（昭和28）に貸衣裳専門の「ワタベ衣裳店」として京都の地に創業した、現在のワタベウェディング株式会社（以下ワタベウェディング）である。

1962年（昭和37）に京都で初めて総合結婚式場を始め、これが大成功したことでワタベウェディングは一気に成長する。1973年（昭和48）には逸早く海外に進出し、ハワイのホノルル店を開設する。初年度から1000組以上の挙式を手掛け、さらに大きく成長したが、この時、海外挙式の国内マーケットを生み出すと同時に、ウェディングドレスを結婚式の必須のアイテムに押し上げたのである。

ワタベウェディングは、昭和の終わりから平成にかけて業界で初めてウェディングドレスの製販一貫体制を確立し、時代のニーズに即した高品質のウェディングドレス、さらには婚礼スタイルを提供し続けている。世界各地に支店を設け、総合プライダルのトップ企業として成長を遂げた今なお本社を創業の地、京都に置き、京都発のプライダルを提案している。

2. 京都のプライダル企業の成長

ワタベウェディングの設立に先立つ1952年（昭和

27)には、これまで呉服卸商であった高見重信商店が婚礼衣裳製造卸の株式会社高見商店（現在の高見株式会社、TAKAMI BRIDAL ブランド）を設立。その後、団塊世代の結婚ブームを迎える高度経済成長の時代から昭和の終わりにかけて、京都では数多くのドレスメーカーを含むブライダル企業が設立され大きく発展した。

一例を挙げてみたい。1976年（昭和51）にウェディングドレスやタキシードの企画・製造・卸売を行う株式会社クラウドディア（以下クラウドディア）が設立。1981年（昭和56）にオリジナルブランド「皇女」を展開し、初のドレスのカラー化を実現させた。「ウェディングドレスは白」との常識を破ったこのカラードレスが花嫁衣裳のお色直しの定番となっていく。ウェディングドレスのトレンドがゴージャス化に転じたこともあり、皇女ブランドのドレスは色だけでなく素材やディテールにおいてもより華やかに豪華なデザインを展開した。クラウドディアは1983年（昭和58）に山本寛齋とブランドライセンス契約を結び、ウェディングドレスでは初のデザイナーズドレスも展開している。クラウドディアは創業から10年余りでウェディングドレスメーカーとして、約20%の国内トップシェアを誇る企業に成長した。

クラウドディアに続き、1979年（昭和54）にウェディングドレスメーカーの株式会社京都マリエが創業（昭和56年に会社設立）。昭和の終わりに近づく1985年（昭和60）にはブライダル専門のファッションメーカーの株式会社グレース、1986年（昭和61）にはウェディングドレスメーカーの株式会社あゆみブライダル、1988年（昭和63）にはブライダル総合メーカーとして株式会社アルファブランカ（以下アルファブランカ）が設立された。アルファブランカは設立以前から関係のあった、ウェディングドレスデザイナーとして有名な桂由美のユミカツラとライセンス契約を結び、業界トップクラスに成長する。特に1970年代から1980年代にかけて、京都のウェディングドレスメーカーの活況ぶりは国内随一となった。

クラウドディアをはじめ京都に誕生した企業の多くは、当初は衣裳製造卸すなわちドレスメーカーとしての役割を中心としていたが、後にブライダル全般をプロデュースしていくことを目指したブライダル総合メーカーに成長していった。

V 時代とともに変わりゆく姿

昭和の時代、ウェディングドレスは他のファッションと同じように欧米のトレンドを追いながら進展していった。京都のウェディングドレスメーカーも例外ではない。戦後の時代のウェディングドレスのトレンドを見てみよう。1940年代のトレンドは自然に身体に沿って流れるような細身のシルエット、ヘッドピースとヴェールの組み合わせ。ブーケは小さめのものが人気であった。図5は雑誌に掲載された1940年代前半の結婚写真である。花嫁のウェディングドレスには1940年代のトレンドが見られる。1947年のディオールの新ニールックが発表された後は顕著にウェディングドレスのトレンドがハイファッションとともに推移することになる。1950年代はニールックの名残だろうか、細くV字に絞ったウエストにたっぷり広がるスカートのデザインが多くみられる。レース使いが人気で、レースのフリルを何段にも重ねたドレスも多く見られる。既に挙げた図1、図2、図3は1950年代のウェディングドレスであるが、そのデザインは当時のトレンドに沿っている。日本ではこの頃まで花嫁衣裳は自分のものとして通常は仕立てていたが、1950年代後半に貸衣裳の婚礼衣装が定着し、特にウェディングドレスでは貸衣裳が主流であった。そして1960年代に入る頃から徐々に本格的なウェディングドレスの需要が生まれることになる。1960年代のトレンドはそれまでのニールックに変わってハイウエストのエンパイアスタイルがトレンドとなり、スリムなウェ



図5 1940年代前半のウェディングドレス

終戦直前に挙げた結婚式。
流れ落ちるシルエットのウェディングドレスに
レースのヴェールが印象的。
「それいゆ」No.14（昭和25）

ディングドレスが流行した。1970年代は、1960年代のトレンドが引き続き人気であった。これに加えてスモックドレスなどのルーズで流れるようなシルエットや、自然なAラインのドレスがトレンドとなった。1970年代のドレスはスカートのボリュームは大きくなく、可憐さや清楚さが感じられる（図6、7、8）。1980年代に入るとウェディングドレスは徐々に豪華さを増していき、1980年代後半はその傾向が一気に加速した。布地をふんだんに使い何段にも重ねたフリルや大きく膨らんだパフスリーブ、長いトレーンに長いヴェール、とにかく豪華でボリュームの大きいものとなった。ドレスと併せて花嫁のブーケも一層豪華で大振りなものとなった（図9、10）。

京都が生み出すウェディングドレスに形態上特別な特徴が見られるわけではない。しかしながら京都には大いなる創造性があった。それは繊維産業の街として栄えた基盤ともいえるものづくりの姿勢であり、高い

感性、意匠のオリジナリティ、確かな技術が可能にしたものであろう。その創造性があったからこそ和装、洋装の垣根を越えて、ウェディングドレスの産地をも成すという変化を生んだのである。



図8 1970年代後半のウェディングドレス

流れ落ちる細身のシルエットだがロングヴェールで豪華さが演出されている。



図6 1970年代前半のウェディングドレス1

ハイウエストの切替で、細身のAラインのシルエット。小さなブーケが人気だった。



図9 1980年代半ばのウェディングドレス

スカートが裾広がりにボリュームを増し、パフスリーブ、ロングヴェールでゴージャス。



図7 1970年代前半のウェディングドレス2

綿素材でナチュラルなドレス。シルエットは当時の定番のシルエット。



図10 1980年代末のウェディングドレス

スカートのボリュームが更に膨らみ、より華やかなデザイン。ブーケも豪華で大振りなものに。



図 11 京都の呉服屋で注文仕立てされたドレス (1975)
 左：ノースリーブ・ロングドレス
 中央：ケープ着用時
 右：手描き意匠部分

図 11 は 1975 年（昭和 50）、京都市内烏丸三条近くにある高級染呉服製造卸売業の川勝商事株式会社で注文仕立てされたドレスである。ノースリーブのロングドレスとケープのアンサンブルで、ドレスにはシルクジョーゼット、ケープにはシルクシフォンが使用されている。鮮やかなパステルグリーンに水彩タッチで描かれた花は手描き染めである。パステルグリーンは当時の流行色の一つであった。京都の老舗の呉服屋が洋装のドレスの注文に応じることができたこと、京友禅や和装に携わる技術者が持つ優れた技能を生かしたドレスを生み出すことができたことは京都の創造性の表れである。

伝統繊維産業では、西陣機業が 1975 年（昭和 50）を境に生産量が減少に転じたのみでなく、きもの企業数が激減している。ここでは和装業界全体が転換を要し、広巾服地などを堅調に推移させるなどの変化や製品の付加価値の見直しを行い、産地の機能を維持してきた。昭和の終わりから 1990 年代後半にかけては、国内唯一言えるほどに活況を呈していたウェディングドレス産地としての京都に変化が迫られた。異業種のブライダルビジネスへの参入やバブル崩壊による派手婚から地味婚への人々のニーズの変化など、ブライダルビジネスに表れた変化はウェディングドレス市場に否応なく影を落としたのである。ウェディングドレスは海外生産の低価格商品が出回り、トップクラスのドレスメーカー企業が倒産するケースも現れた。製造コスト削減のためあって、大手企業が縫製工場を海外に移すなど、産地としての京都は変化を余儀なくされた。しかし、京都の地が時代のニーズに応える創造力

を失ったわけではない。歴史と伝統に下支えられた豊かなデザイン感性と確かな技術をもって、時代時代に新たなウェディングドレスが今も京都の地から生まれている。

VI まとめ

京都は戦後から昭和の終わりにかけて、ウェディングドレスの一大産地であった。多くのメーカーやブライダル関連企業が設立され活況を呈していた。この背景には京都が古くから伝統的な繊維産業の街として栄えていたことがある。このため老舗百貨店による海外デザイナーとの提携や、洋裁学校の設立なども戦後の早い時期から進められてきた。とくに 1959 年（昭和 34）のロイヤルウェディングの際の皇太子妃殿下がお召しになったローブ・デコルテ（ウェディングドレス）に京都の織物が使われたことは、京都の誇りであったことはもちろん、ブライダルの街としての京都の発展への道を拓いた。その後の高度経済成長と団塊世代の結婚ブームに支えられ、京都に設立されたウェディングドレスメーカーをはじめとするブライダル企業は一気に成長していった。

ウェディングドレスを結婚式の必須アイテムに押し上げたのも、海外のウェディングに対応できるドレスや、お色直しのカラードレス、ウェディングドレスでは最初のデザイナーズドレスなど、いずれも京都で生み出されたものである。京都は時代のニーズに即した高品質のウェディングドレス産地、さらには新しい婚礼スタイルの発信地であった。

参考文献

- ・『桂由美 Magic』集英社、2008
- ・川島ルミ子『ディオールと華麗なるセレブリティの物語』講談社、2004
- ・ひまわり社『それいゆ』1946 - 1960
- ・小泉和子『洋裁の時代』農文協、2004
- ・生活文化研究所『衣服人類学 - 「日本人の装い文化」と 21 世紀ファッション -』啓文社、1990
- ・Marnie Fpgg『Vintage Weddings』CARLTON Books、2010